

ふくりゅう

発行所 NPO日本下水文化研究会
 発行責任者 酒井彰(運営委員代表)
 発行年月日 平成12年7月31日
 印刷所 株式会社 愛甲社
 編集 小松 建 司
 夏号(通巻第19号)

話題満載 101年目のバルトン忌



昨年の没後百周年バルトン忌の熱気は、その後も冷めることなく続き国内はもちろんスコットランドや世界各地から情報が寄せられています。おもしろくて興味深いプログラムをご紹介します。



シャーロック・ホームズ・クラブ石井貴志さんの講演

石井さんはホームズ・クラブのバルトン研究家として知られる方です。講演では終生の友であったコナン・ドイルとバルトンをめぐる驚くべき出来事から、先日解決したマクドナルド事件(当研究会も貢献!)までホームズ流的確な調査によって得られた史実を、資料やスライドを駆使してお話しくさせていただきます。秘薬バルトン丸って何? ご期待ください。



コナン・ドイル

秘薬バルトン丸

日本スコットランド協会理事・稲永丈夫さんのスコットランドからの報告

スコットランドのバルトン家の調査は、稲永さんのお人柄と語学力によりバートン家、イネス家(母方)、祖母の家系のパットン家へと進んでいます。二百年の時をこえて魅力的な人々がよみがえり、鳥海さんにつながります。

♪東京バグパイプバンドのメンバーによるバグパイプ演奏

大迫力のバグパイプのライブ! きっと青山霊園に眠るすべての人々が目を覚まし、バルトン先生の墓碑のまわりは精霊たちでいっぱい! さらにホールでもスコットランドの曲を演奏していただく予定です。



未発表資料の展示

鳥海さんから「バルトン先生胸像除幕式(台湾)組写真」「浅草十二階の青写真」「たま子さんの結婚式の写真」などをお借りして複製しました。

そして、たま子さんの次男榊原政弥氏のお孫さんをお迎えする予定です。

驚きと感動に満ちた2000年のバルトン忌にどうぞご参加ください。



「2000 バルトン忌」次第

平成 12 年 8 月 4 日 (金)

1. 墓 参 : 青山霊園 バルトン墓碑

13:00~14:00

集合場所; 霊園内の島村花店(地図参照)

2. 講 演

会 場; AAビル会議室「コンフォート」

受付開始; 14:00~

①開会挨拶

14:30~

日本下水文化研究会

酒井 彰 代表

②バグパイプ演奏

14:40~

東京バグパイプバンド

佐々木ゆかり 氏

③特別講演 (石井氏プロフィール紹介)

15:00~

「バルトン先生とゆかりの人々」

講 師:シャーロックホームズクラブ 石井 貴志 氏

④稲永氏からの報告

17:00~

ジョーンヒルバートン及びコスモイネス両回想録

⑤閉会挨拶

17:20~

日本下水文化研究会

稲場紀久雄 氏

3. 親睦会

17:30~18:30

応 募 方 法

御氏名、所属、連絡先TELと、参加行事

① 墓 参

② 講 演 (会費¥1,000)

稲永さん翻訳の回想録をお配りします

③ 親睦会 (会費¥2,000)

を明記のうえ、下記本会宛にてFAX又はハガキにてお願いいたします。

なお、会費は当日受付にてお支払い下さい。

NPO法人 日本下水文化研究会

FAX 03-5363-1129

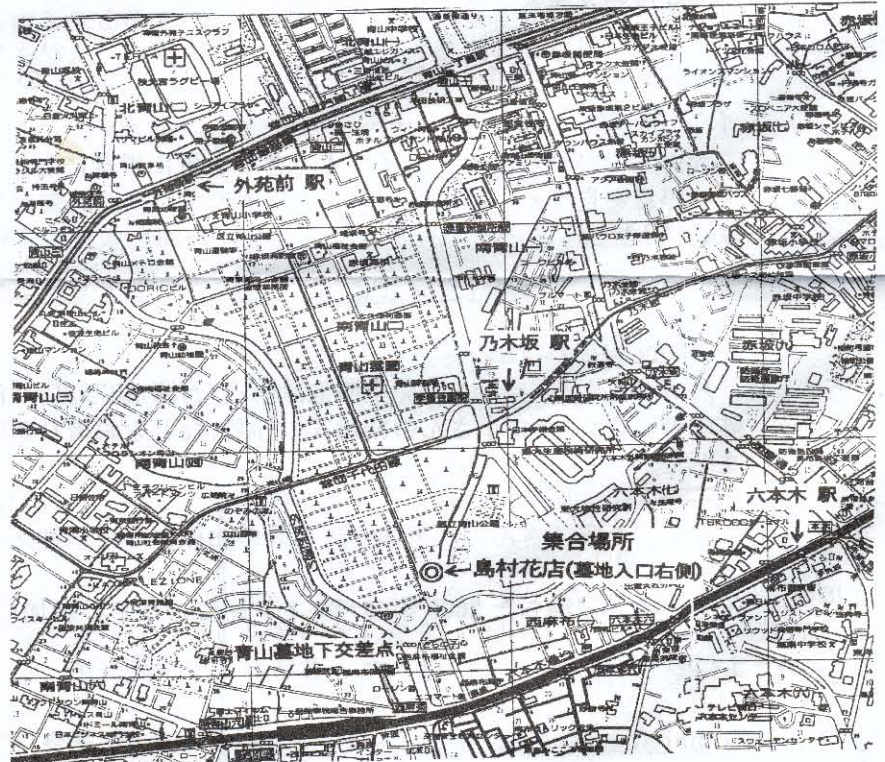
住 所 〒162-0067 東京都新宿区富久町6-5

バルトン碑墓参の集合場所

島村花店

住所 港区南青山2-34-31

TEL 03-3401-2682



平成 12 年度第 1 回定例研究会

定例研究会に参加されたお二人の方から感想が寄せられましたので紹介します。

下水文化第一回定例研究会に出席して

都コンサルタント 野田 久雄

平成 12 年 6 月 10 日 P.M 1:00 時～5:00 時の間、京大会館にて下水文化第 1 回定例研究会が開催され、学会、民間から多数の同好者が出席し、活発な意見が交換された。

筆者も聴講者の一人として参加し、大いに得るものがあった。

当日の講演は次の 3 題である。

- | | | |
|-------------------------|-----------|--------|
| 1. 「洛中塵捨て場今昔」 | 京都府庁 | 山崎 達雄氏 |
| 2. 「上賀茂明神川に関わる生活の今昔」 | 京都産業大学 | 勝矢 淳雄氏 |
| 3. 「近世三都の水事情—江戸・名古屋・大阪」 | 中日本建設コンサル | 山野 寿雄氏 |

これらの内容はいずれも従来の研究に見られないユニークなものばかりで、実用的な技術を主題とする昨今の研究発表とは異なり、ある種のロマンを感じるものばかりで、一般的な手法では適切な評価が出来ないものばかりであった。

従って、講評する事自体不適切であるが、この会の今後のより一層の発展を願って、感じたままを書き記すことにした。

1. 「洛中塵捨て場今昔」を聴講して

山崎 達雄氏の調べによると、京の都での「町触れ」として記録に残る「塵」問題としては、元禄 5 年 (1662) のものがもっとも古く、以後、文久 2 年 (1863) までの 170 年間について「ごみ」に関する町触れに出現するごみの種類、ごみ捨て場などについて調べられており、なかなかの労作である。

この 170 年の間に町触れに登場する出現頻度を見ると、最も多いのは、同じ種類のごみと解される、「塵芥」、「ちりあくた」、「ちり芥」、「芥」、「こもく=ちりあくたの方言」の 6 種類で 80 回を数え、全体の 123 回の 65% をしめる。ついで灰、粕が 9 回、8 回とつづいている。

その他のごみとしては、火事 (天明の大火他) が 5 回、面白いのは嘉永元年 (1848)～文久 2 年 (1863) の間に、七夕、盂蘭盆供え物が 3 回現れていることである。

この時期は、黒船の来航 (1853) から薩摩藩士による生麦事件 (1862) までの太平の眠りを覚まされ、国内が騒然としてきた時期である。

京の人達は不安をうち消すため、こぞって七夕祭りや盆供養に熱心になったのであろう。それはさておき、65% の出現回数のごみの正体は何であろうか、お茶の出がらし、野菜くず、卵の殻などは植木や畑の肥料として利用されていた時代である。

推測すると、これらはたぶん、草履、下駄などの使い古したもの、藁くず、木っ端、灰、砂埃の類が主たるものであったと考えられるが明らかでない。

又、洛中の数カ所にごみ捨て場が指定されているが、塵芥捨て場からの最終処分はどの様になされていたのか明らかでない。この報告が導火線になり、「ゴミの収集処理処分」の変遷史が纏められる日が来ることを期待する。

2. 「上賀茂明神川に関わる生活の今昔」を聴講して

この報告は最近各所で提起されている、歴史的遺産を保存する形での町づくりについてのありかたを論じたものである。

その内容は、上鴨神社 (賀茂別雷神社) の由来から説き起こし、鴨一族が水田開発のために開削した明神川と蟻ヶ池を源流とし、上賀茂神社内を二手に分かれて流れる御手洗川 (みたらしがわ=浄水か?) と御物忌川 (おものがわ=下水的役割か?) が明神川と合流し、社家に沿って、遣り水の役割と、農業用水の役割を果たしながら流れていることが説明された。その上で、高度成長期に、水質の悪化と交通事情から暗渠化されようとした、社家に沿った明神川を、農業関係者の反対で見送られ、最近の歴史風土を見直す潮流に乗り、また昭和 63 年に

制定された京都市の「上賀茂伝統的建造物群保全地域」の指定を受けて、川のある社家の保存活動の必要性和保存活動の現状が紹介された。

元来、自然景観や歴史景観の保全は、その部分のみ保全すれば事足りる物でなく、周辺を併せた全体としての景観保全が必要であり、ある程度の広さが無くてはならない。

矢野淳雄氏は、蟻ヶ池・小池から明神川へ至る一連の流れを説いておられ、それなりに評価できる。しかし、京都市や住民運動の人達が社家とその前の明神川のみを対象とするなら近視眼的と言わざるを得ない。

なお、明神川の清掃で、社家の石垣の基礎が緩んできているとのことであるが、安易にコンクリートで補強するのではなく、間伐材などを利用し、生き物に優しい環境を創造すべきであろう。

3. 「近世三都の水事情を聴講して」

演者の山野氏は、講演の冒頭、三都の中に京都市が入って無いことえの理を申しておられたが、京都・奈良は古都であり、その歴史や成り立ちが大阪・名古屋・江戸とは全く異なり、近世に発達した都市としては京都は含まれないと思う。

三都の水事情であるが、我々関西に住む人間としては、太閤の背割り下水に驚いていたが、この度、江戸の給排水システムの規模の大きさには改めて驚いた次第である。

江戸時代の人口は、江戸が約100万人にたいし、大阪が約30万人と言われているので、やはりこの規模の差は当然かもしれない。

さらに、江戸では水奉行が設けられ、水管理だけでなく、給排水の水路網を交通路として利用し、北陸との交易を行っていたと言うから、その大きさには太閤以上のものを感じた次第である。

以上、取り急ぎ下水文化第一回研究会に出席して感じたことを述べたが、浅学のため誤評があればお許し願いたい。最後に今回の研究会を契機に研究会の益々の発展を願う者である。

日本下水文化研究会主催の講演会に出席して

オリジナル設計株式会社 岩崎 晃

去る6月10日、京都市の京大会館において日本下水文化研究会の講演会が開催された。今回は、初めての関西地区開催とのことで、貴重な体験をさせていただいた。

演題は、講演順に山崎達夫氏「洛中塵捨場今昔（らくちゅうちりすてばいまむかし）」、勝矢淳雄氏「上賀茂明神川と人々の暮らし」、及び山野寿男氏「近世三都の水事情」であり、いずれも人々の生活と川の関係にかかわる興味深い内容であった。

最初の京都における史のごみ処理研究の話は、日頃から古文書など見ることはなかったためか刺激になった。印象的なのは、以前のゴミはもともと川へ捨てること前提とした土、どろ、災害処分物、お盆での供え物などであって、現在のゴミの内容とは異なるものを指していたことである。現在では、一般には可燃物、不燃物、有害物で分別されているが、その多様性に昔の人はさぞや驚くことと思う。やはり、ゴミ（廃棄物）はその時代、地域、生活様式、思想など文化の違いが表されるバロメーターである。また、ゴミの埋め立てによってできた土地に家を建てるなどは現在でもありうる話で、昔ではゴミの有効利用となるが、今では有害物質の埋め立てにつながりかねないだろう。なお余談であるが、ゴミが「塵芥」、「ちりあくた」と呼ばれていたことから、元来は清流であった川がゴミ投棄で汚染されると「芥川（あくたがわ）」になるという話は、最近まで使われていた「どぶ川」という名前と比べ、何となく文学的な表現だと感じた。

次は、同じく京都における明神川とその地域にかかわる歴史的考察であった。全体的な印象としては、京都としての歴史的な風土と地域住民の美意識を強く感じた。あまり聞き慣れない言葉ではあるが、「社家町」というキーワードこそが、水が流れる歴史的風景の保存を必要とするのではないかと思う。これらの風景の一部はスライドで見せて頂いたが、話を聞くにしがたい、やはり現地を見てみたい衝動にかられた。確かに、白壁の歴史的な建物とせせらぎのあ

る小河川とが一体化した風景は、一度壊れてしまうと再生が難しい。しかし、地域の美化保存会による川ざらいの方法は、生態系の破壊や石垣・土台への悪影響が出ていることから、話を聞く限りでは、どこか自然でなく無理があるように思えた。

最後は、近世の水事情からの三都として、大坂、江戸、名古屋における都市づくりと上下水道の発達史が主題であった。対象が文字どおり三都に及ぶとともに、利根川・大和川の付け替えによる水系変更や木曾川・長良川の御囲堤など、大土木工事によるスケールの大きい話題が次から次ぎへと進んだ。この中であって玉川上水の話は印象に残る。以前、私自身が立川市に住んだことがあり、小平市に近いこともあって、よく玉川上水沿いの遊歩道を歩いた。このとき、東京都・多摩川上流流域下水処理場から放流された維持用水が流れていて、深く大きい素掘りの水路を目の当たりにしているからである。

以上、それぞれに感想らしきものを述べてきたが、日本下水文化研究は非常に史的でロマンを感じさせる。今後もこのような機会をとらえ、偏りがちな日常的知識の頭にさわやかな風を吹き込んでいきたいと思う。

以上

本の紹介 1

小林司・東山あかね編

新・優雅に楽しむシャーロック・ホームズ読本
フットワーク出版
3,400円



これから迎える高齢化社会で、ひとつの豊かな時間消費の形を示すようなタイトルですね。シャーロック・ホームズの楽しみ方が実に多面的に編集されています。作者アーサー・コナン・ドイルの人となりにも迫っていて、そこにバルトンが登場します。その章『御雇外国人バルトン』メディアに浮かぶ肖像の執筆は、もちろん

ホームズクラブのバルトン研究家・石井貴志さんです。シャーロック・ホームズに登場するジョン・ヒル・バートン（バルトンの父）やバルトンとコナン・ドイルの交友が描かれています。今年のバルトン忌での講演が楽しみになりますが、どうしても参加できない方、優雅にシャーロックホームズを楽しんでみてください。

本の紹介 2

堤武・萩原良巳編著

都市環境と雨水計画 —リスクマネジメントによる—
勁草書房
3,200円



都市環境を語るとき、「水」は欠かせない重要な要素です。都市の水循環のインプットとしての「雨」をもう一度考え直そうというのが本書の意図です。最近、雨が地下空間を襲う現象が頻繁に起きていますが、これは、都市開発においていつも「雨」を“ノケモノ”にしてきたツケ

であり、雨との付き合い方を再考しなければ、こうしたリスクは軽減できないとこの本では主張しています。

長く日本下水文化研究会の評議員としてご指導いただいていた堤さんから、雨に寄せる熱い思いを伝えられてきた「教え子」たち（酒井を含む）が中心となって共同執筆しました。都市の雨水問題は、下水道の排除能力の向上などといった単眼的な視野では到底解決の見通しが立たない現実を理解するための一助になればと思います。

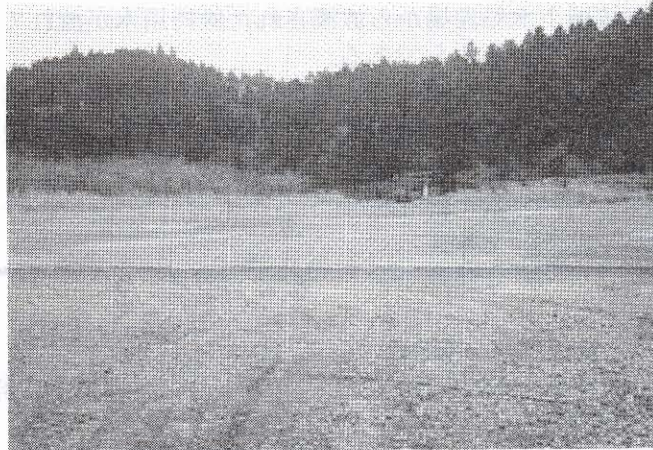
酒井 彰（会代表）

弁天様と水を訪ねて（四）

栗田 彰

箱根芦の湯・阿字ヶ池弁才天

『箱根観光案内図』を見ますと芦の湯温泉の所に「阿字ヶ池弁財天」があります。箱根町郷土資料館で聞きますと、池は埋め立てられているがいまでも弁天様は祀られているということでした。バス停の「芦の湯温泉入口（国道1号のバス停は芦の湯）」の前に小さな池がありました。「阿字ヶ池」の名残なのでしょう。説明板によりますと「葦の池」が訛って「阿字ヶ池」になったということです。



池から少し離れた所に大きな広場があります。池を埋め立てた跡なのでしょう。その北隅に小さな赤い鳥居が見えました。「阿」の字の部分壊れて「字ヶ池弁財天」の板看板が鳥居に寄り掛かるようにして立っています。鳥居をくぐって行きますと小高い山の裾に木造の鞘堂に納められた石造りの小さな祠があります。老婆が一人でお詣りに来ていました。見ておりますと手足が思うように動かないようで、線香に火をつけるのも、線香立ての前まで行く石段を登るのもくようやっという様子でしたので手を貸してあげました。お祈りが終わるのを待って聞いてみました。

「ここには弁天様のお像が祀られているのでしょうか？」

「男弁天といわれて髭のある石の弁天様ですよ。お祭りのときにはあちらのお社に移されます」

男じゃツマンネエとは思いましたが、老婆が立ち去ってから祠の扉を開けてみますと、人頭蛇身の石像が祀られていました。なるほど顎のところに髭らしいものがあります。祠の前にはワンカップと一升瓶が供えられていました。

老婆の言われていた「あちらのお社」は池の跡の広場の西側にありました。立派な木造のお堂です。お堂

の扉には門が釘付けにされています。ことによたら、こちらに女神の弁天像がありはしないかと、窓から懐中電灯を照らして中を覗いて見ますと「阿字ヶ池辨財天」と書かれた木札が祭壇に納められているだけで、お像はありませんでした。お堂の傍らにある由来碑によりますと「延享元年（一七四四）建碑の文面に「旧蹟再興」とあるので古くから祀られていた」ようです。

お堂の裏にも別に小さな木造の祠があります。扉の中は御幣と木札があるだけでお像はありませんでしたが、ワンカップが供えられていました。

原稿募集

「ふくりゅう」では、原稿募集を行っております。
 ◎紙上研究発表◎現在お住まいの地域情報◎水に関する情報等何でも結構です。
 宛先は郵便番号162-0067
 新宿区富久町6の5 NJS富久ビル別館
 NPO法人 日本下水文化研究会
 または、e-mail aan63630@syd.odn.ne.jp
 に添付ファイルでお送りください。

会費の請求について

現在12年度の会費請求について準備を行っていますが遅れています。NPO 法人になって、振込先の変更の必要性が生じたためです。

振込先は、次の通りになりますので、今までの振込先を変更してください。

郵便振込 00120-8-164432

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

銀行振込 富士銀行本店東京都庁出張所

普通預金 2323883

特定非営利活動法人 日本下水文化研究会

編集後記

今後の下水文化研究会の催し物等のお知らせは「ふくりゅう」と「ホームページ」でお知らせいたします。今回は、バルトン忌のお知らせが載っていますのでお見逃しの無いように。

ホームページは

<http://www.jca.apc.org/~yamade/index.htm>

で見てください

(建)